20200906レムナント教会1部

**イエス・キリストの心構えで(Ⅱサムエル記9:9-13)**

　イエス様を信じることによって救われた信者ひとりひとりは、自分が思っている以上に貴重な尊い存在です。なぜかと言いますと、他の人と比べてどこか優れた偉いところがあるからではありません。この世の教育によっては解決できない問題、宗教や道徳、人格などによって解決不可能な問題の解決のために召されているから尊い存在なのです。それはただ唯一イエス・キリストを通してのみ得られるいのちの祝福です。そのいのちを得させるために用いられる立場の存在であるがゆえに信者ひとりひとりはとても貴重な存在です。ということで、信者ひとりひとり、すべての信者に、神様はこの祝福を全うすることができるように祝福を与えられます。もうすでに与えられているし、今も与えられる続けていらっしゃるわけです。その祝福の中の大事な一つの祝福が何かといいますと、信者ひとりひとりがイエス・キリストの心構えでいられるようにしてくださるということです。イエス・キリストの心構えでいられる、それが可能なのでしょうか。十分可能であり、それがこの世を生かすために召されている信者に神様が用意していらっしゃる祝福です。また約束でもあります。それはイエス様が信者ひとりひとりの内側に離れることなく、いつまでもともにおられるので十分可能なことです。

　今日の聖書の箇所は、ダビデが神様の大いなる祝福を体験し、また何より神殿の奥義を解き明かされることによって、キリストの救いの祝福についてより深く悟ることになりました。そのあともうすでに滅びて、この世に全く意味のない家系になったサウルの家系を顧みることになったというお話です。サウル王の家系を顧みることによって誰か生き残った者はいないのかと探し始めました。そこでサウルに仕えていたしもべの一人が現れたので、「おまえだけなのか。誰か家族の中で生き残った者はいないのか」と問いかけると、「サウル王の孫にあたるヨナタンの息子が一人います。足が不自由な障害者でありますがいます」と言いました。ダビデはその息子を呼んで、その息子がダビデの前で恐れるようになります。それはある意味、当然でしょう。敵の家系の者だったからです。それでダビデは「恐れないように」と言って、その息子にまたサウル王の土地をすべて返します。それから、しもべには、この息子が死ぬ時まで、しもべの家族とともにずっと仕えるようにと命じるわけです。それにとどまらず両足が不自由な障害を抱えている息子をダビデの、王の食卓に招いて、いつも食事は王と一緒にするようにという配慮をしながら、思いやりをもって面倒を見ることになりました。サウル王の家系の者で、もちろんヨナタンとの友情もありますので、そのしもべの息子の面倒を見るということは人間的にありうることかもしれません。けれども、ダビデにとってそれはただの友情による配慮ではありません。ヨナタンも契約の人でした。そのダビデは完璧に滅びて何の価値もない、そして、崩れ落ちている家系、またその個人を見ると障害を抱えている者です。障害を差別してはいけません。でも、当時は障害を抱えている人間は、なにも役に立たないので無視されるような、意味のない存在として扱われていた時代です。それにもかかわらず、そういうことには一切構わず、その人を王の食卓のところまで引き上げて、その地位を与えることによって一緒に食事をすることになったということです。

　ダビデはなぜこういうことができたのでしょうか。また、ダビデはなぜこういうことをしたのでしょうか。もちろんダビデはキリストを象徴する人物です。なのでキリストから見られるものをダビデを通して垣間見るという意味もそこにはあります。私たちがキリストによって救われて、また高く上げられることによってキリストとともに食事をする者にまでなるという意味もそこにはあるし、ダビデはキリストの祝福が何か分かっていたので、キリストの霊に満たされることによって、そのキリストが現れるようになりました。そのキリストの愛とキリストの祝福、キリストの力がダビデを通して染み出て流れ出るようになっているという場面を私たちは目撃しているのだと考えなければいけません。つまりダビデは、キリストの心構えでいたということです。キリストの心構えでいる者は、自分の人格などと関係なく、人を見る目が変わります。そして、人を心に抱く、人を生かす者になります。神様はこの世を生かすために召されている尊い信者ひとりひとり、すべての信者にこのような祝福を約束して、このような祝福を用意していらっしゃるということを覚えて、ぜひこれが皆さんのものになり、皆さんがダビデのようにイエス・キリストの心構えで残りの生涯を歩いていただきたいとそう願います。

　イエス・キリストの心構えというのは、一体どういうものだったでしょうか。私たちがイエス・キリストの心構えでいるということは、どういう意味なのでしょうか。まず第一にイエス様は滅びて当然な罪人の身代わりとなって十字架で死なれた方です。これがイエス・キリストの心構えです。人はみな罪人です。聖書には、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」と書いてあります。人は全員、創造主であり、いのちの根源である神様を離れてしまいました。その結果、自分の意志とは全く関係なく、サタンの奴隷になってしまい、生まれながら地獄の運命を抱えて生まれて、その地獄の運命の中を生きるようになってしまいました。その結果、世の中にいる間は様々な苦しみを味わい、不幸な人生を歩き、その不幸からなかなか出られません。その結果、霊的にも精神的にも肉体的にも病を患うようになり、人生そのものは不安だらけになり、右に行っても左に行っても疲れるしかありません。そして、自分の心が壊れ、家庭環境が壊れて、人間関係が壊れ、そして、国と国との間が壊れ、様々なところにおいて崩壊していくようになります。そして、この問題は人間自らは解決できないし、この罪は絶対に赦されることのできない罪だったわけです。そのような罪人なのです。最終的には、さばきを受けることになり、残念ながら永遠の刑罰のところ、地獄に行くしかない存在になりました。誰がでしょうか。すべての人が。そして、このような不幸な人生を歩き、最終的にはさばかれて永遠の刑罰のところに入れられるということがおかしいことではなくて、当たり前で当然なのです。人間は罪人なので、自分自ら神様との約束を破ってサタンに従った罪人なので、辛いでしょうけれども、痛いでしょうけれども、嫌でしょうけれども当然なのです。当たり前なのです。文句言えません。それなのに不思議で、不思議でしょうがないけれども、神様はこのような当然滅びるしかない罪人である人間を愛しておられる方なのです。これが不可思議なことです。これが当たり前ではなくて、到底、ありえないことなのです。しかし、神様はそのような人間を愛しておられます。それで罪人で滅びるしかない、当然そのような存在である人間を見るときに、その目でご覧にならずに、そこから救われる存在として見るわけです。神から与えられるいのちを得る、いのちに預かる存在として神様は扱い、そのように見ていらっしゃいます。なので罪を犯した途端、最初から創世記3：15を見ると、女の子孫を通して蛇の頭が踏み砕かれて、あなたがたは当然滅びるしかないその罪から救われるようになるという約束をされて、その約束をその通りに全うされました。ヨハネ3：16、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」。このように救いのすべてを完成なさいました。十字架の上でイエス・キリストがすべてを完了したと宣言されました。だれでもこのイエス・キリストをただ信じることによって、当然滅びるしかない罪が赦され、その運命から解放され、地獄の子が神の子に、いのちを得るものに変えられるようになります。これはありえないことなのです。ここをよく吟味していただきたいと思います。ありえません。信じられないことなのです。私たちの頭の理解には収まらない、理解できないことなのです。だから、この神の愛、救いの祝福を恵みと言います。当然滅びるしかない存在の私たちが不幸を患い、痛い思いをして、大変な辛い人生を送るということは当たり前なことなのです。それに何一つ「なんで？なぜ？」と文句を言えるような立場ではありません。しかし、神様は不思議なことに、到底信じられないけれども、そのような罪人を一方的に救われた方です。恵みのほかには何も言えません。人のレベルがどうのこうの、水準がどうなのか、人間が従い、縛られている法則がいろいろありますが、その法則が何なのか、また人間の理解などと全く関係なく、それに抵触されずに、それに一切関係なく、神様は人を救われる方であり、人を愛していらっしゃいます。これが神様が人を見る見方です。人に対しての神のみむねというものです。イエス・キリストの心構えというものは、イエス様はこの地上に来られて、人間の姿をとって、この神の愛を実現するために世に現れました。けれども、そのイエス様がこの世に来られ人を見るときに、神の目で人間をご覧になっていらっしゃった。これがイエス・キリストの心構えです。イエス様も人間の体をとっていらっしゃるので、人間の感情というものが芽生えることになりました。しかし、イエス様は、ご自分の感情や世にあるそれが必要なのかどうか関係なく、どのような法則でもその法則によって見たわけではありません。感情に左右されて人を見たわけでもありません。また是々非々、良かったのか、悪かったのか、正しかったのか、どうだったのかなどによって人を見たわけではありません。また、損得によって、それを計算して人を見たわけではありません。神の目で人をご覧になりました。そういう意味では、人間としてのイエス・キリストを捨てたわけです。人を見るときには、いろいろな見方というものができるのではないでしょうか。その人を見るときの見方をバックアップしている様々な法則やいろいろなものがあるわけです。そういったものに一切惑わされず、一切そういうことに縛られず、滅びて当然な罪人で、殺人、強盗犯、売春婦なのに、神様はそのようにご覧にならず、「あのたましいはわたしの愛によって、キリストの血潮によって救われるために備えられている、いのちを得させるためにこの世に生まれた存在なのだよ」とおっしゃるから、それに従ったわけです。それに従順されました。これがイエス・キリストの心構えです。

　それがいちばん象徴的に表されている聖書の箇所があります。マタイ26：39、イエス様が十字架の前で最後に神様に祈りをささげるために一人で祈りの場に行かれた時の祈りです。「それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください」。これがイエス・キリストの心構えです。目の前にいる人間が強盗犯でも、精神的な病を抱えてでたらめな人生を送っていても、その通りに見ることではなく、神のみこころのままになさってくださいと、もう自分がいません。これがイエス・キリストの心構えです。それを理解していたパウロは、ピリピ2：3-8でこのように勧めています。「 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです」。罪人のために、滅びて当然なのに、人間の法則、因果応報、律法から見るとさばかれて当然なのに、「違うよ。彼らのためにあなたが十字架で身代わりとして死ななければいけないよ」「なぜ私が」「彼らがあなたより優れた者として見なさい」。神様が今そのように見て、そのような待遇をしていらっしゃるから、イエス・キリストはそれに死ぬ時まで従いました。つまり、一点たりとも文句を言ったり、他の何かの法則を取り入れたりというようなことがなかったということです。それがしもべの姿です。しもべにはその主人がおっしゃること以外には、どのような法則も通用しません。存在しません。それだけです。神様が人をそのようにご覧になっていらっしゃるので、一部のレベルで考えたときには悪い、良いといろいろな評価があるでしょうけれども、それを無にしてただ従うだけです。

　そのようにしてイエス・キリストは、十字架で身代わりとして死なれて勝利の主となられ、誰でもイエスを信じる者は、イエス様の食卓に招くようになります。それを示した場面が最後の晩餐です。最後の晩餐に弟子たちを招かれました。それが聖餐の告白の意味です。イエス・キリストが神のみこころに従い、神の目で人を見て十字架に従った結果、人はいのちを得るようになります。エペソ2：5-6を見ますと、2部の礼拝でもこの部分が出ますが、キリストとともに生かし、ともによみがえらせ、ともに天のところに座らせてくださいました。それが最後の晩餐が象徴している内容です。今は物理的に最後の晩餐に預かる理由はありません。この地上を歩いていながらも私たちは天のところに座らせて、万軍の主とともに食卓をともにしている者で、だからイエス様の血と肉を日々、飲み食いするものなのです。そこまで私たちを引き上げました。イエス様と同じ地位にまで私たちを引き上げられたということです。これがイエス・キリストの心構えです。

　ですから、イエス様の心構えでいる信者であれば、人を見る目が変わります。修行によってではありません。パウロがピリピの手紙で言っていたように、他人を自分より優れた者として見るようになります。「何が私より偉いのか。成績も悪いし、性格も悪いし、社会的な地位もダメなのに、どこが私より優れた者なのか」と思うかもしれません。だから、それは自分のレベルなのです。でも、イエス様はそのように見ていらっしゃるから、自分より優れた者、神の愛に預かるべき、神の御用に預かるように召されている者として、その目で見るということです。イエス・キリストの心構えなので、自分の判断、評価というものはありません。ですから、イエス様と同じようにすべての法則を無視して、自分を無にして、自分のすべてを下ろして、イエス様の心構えで見るわけです。そうすると、簡単に申し上げるとこのような見方になります。信者であれば今現在どのような状況、どのようなレベルであっても、すべての信者を伝道者として見るわけです。神様はそのような希望をもって召していらっしゃるわけですから。ただ、今現在、それが実現されていないだけであって、イエスのいのちを持っている者は、たとえ今さまよっている人間であっても、神様は「伝道者なのだよ、伝道者として召されたのだよ」とおっしゃっているから、それ以外のすべての法則を捨てるわけです。その目で見て、だから仕えるようになるでしょう。そして、未信者を見るときには、どんなに親しい人間であれ、また敵であれ関係なく、伝道の対象者として見ます。この二つの見方以外には持たないこと、これがイエス・キリストの心構えです。いろいろな人間、いろいろな状態、いろいろなレベルがありますが、そういうことにこだわりません。それは神様の導きのための参考にすべき材料であって、見方は「今のレムナントを見るときにCVDIPのCovenantを通して見なさい」と柳先生がそれほど叫んでいらっしゃるでしょう。柳先生は「WRCに参加しているから世界的なレムナントですよ」とおっしゃっているけれども、実際、事実、今の現状を見るとそのように言えるようなレムナントはほとんどいません。けれども柳先生の目にはそのように映るわけです。キリストの心構えで見ていらっしゃるから。皆さんがレムナントを見るときにもそういう目で見ないといけないし、信徒ひとりひとりを見るときもそうです。

　ですから、イエス・キリストの心構えでいると、仕えるしもべの姿に変わります。そして、死ぬまで従ったというのは最後の最後までそれに従う姿勢を崩すことがありません。ちょこっと思い通りにいかないから、また変わらないからと言って、また別の法則に乗り換えられるようなこともありません。しもべなのだから、愛の奴隷なのだから、法則は一つしかありません。愛の戒めの他にはありません。クリスチャンには、イエス・キリストの心構えでいる者には、愛の戒めの他に一切、法則は存在しません。それがよく見られる聖書の箇所、場面があります。ルカ23：34、イエス様が十字架で死なれるときにこのように最後の祈りを捧げます。「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた」。イエス様が最後にご自分を十字架につけて殺している人々を見て祈ります。「彼らを赦してください。彼らは知らないから。彼らも救いのいのちが必要な存在です」。その心構えを持っていたステパノは使徒7：60、自分に石を投げて殺そうとしている人間に向かってこのように祈って息を引き取ります。「そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた」。イエス・キリストの心構えというものです。イエス・キリストがどのような心構えでいらっしゃったのか、そのイエス・キリストが今、信者の自分の内側にいらっしゃるので、私たちに必要なのは自分磨きを通して、自分を成長させる以前に、そのイエス・キリストに満たされて、イエス・キリストの心構えを持つことです。これは人格ではありません。ただの寛容とは違います。キリストの霊に満たされることによって、イエス・キリストがそのように人を見ていらっしゃるから、自分を無にしてそれに従うだけなのです。なぜ従うのか。しもべだからです。それだけが正解なので、私たちがこうだ、ああだと評価することは正解ではありません。世の中にいる人々がこのイエス・キリストの心構えで突っ走ることがあれば戦争などはなくなるでしょう。もちろん世の終わりまで戦争はなくなることはありません。しかし、信者がキリストの心構えを持っているならば、そこには戦争がなくなるのではないでしょうか。ですから、イエス・キリストの心構えでまず自分自身を改めて、自分自身をしっかり吟味するところから始めていただきたいと思います。イエス・キリストが皆さんのしもべとなられました。それで皆さんをイエス・キリストより優れた存在だとみなして、十字架の死をもって皆さんに仕えました。イエス・キリストの十字架によって仕えられた者として自分を見ないといけません。そのほかの評価はすべて嘘です。イエス様の心構えで信者の自分を見ないといけません。

　その結果、皆さんは、万軍の王であるイエス様の食卓に一緒に参加している者なのです。それが聖餐の告白の意味です。聖餐の告白を自分のものにするだけではなくて、自分が王である祭司だと確認する材料にしてください。それから、イエス・キリストの心構えで教会の兄弟姉妹、信徒を改めて見直さないといけません。すべての信徒は、その人にCVDIPがあるという目で見ないといけません。神の尊い御用、ミッションがある存在として見るということがイエス・キリストの心構えなので、教える人間ではなくて、仕えるしもべとしての姿勢を持ちましょう。ちょっと気に入らないからといって途中でやめたり、祈りをあきらめるとかではなく、最後の最後まで、もし死ぬことがあるにしてもパウロのように愛の戒めに従って仕えること以外に道はありません。しもべなのだから。これがイエス・キリストの心構えです。それから、皆さんの周辺の未信者を見る目を改めて見直すようにしましょう。その人がどういう関係であれ、どのような感情がそこに挟まれているのか分かりませんが、すべてを伝道の対象者として見て、ひとりひとりに対して、本当に福音が必要なのだなということを細かく具体的に日々確認していく作業をするようにしましょう。そして、それを確認するたびにその相手のたましいのためにイエス・キリストの心構えで祈るようにしていきたいと思います。他の評価は未信者に対しても、身近な家族だからこれとは例外だろうといって、親として、家族としてのいろいろな私情や感情がそこに移入されることは望ましいことではありません。伝道の対象者です。神の愛に預かるために、つまり自分でも知らない悪魔、サタンのわなからキリストの血潮によって助かるように今許されているたましいなのだと、その目で見ましょう。それを具体的にその人の人生そのものを見ながら確認していくこと、それが愛です。それをせずにただ人を愛しましょうと言うことではなく、「本当に私の親でありがたい方なのだけれど、頭が下がる方なのだけれども福音がないからああなのだね。福音が必要なのだね」ということをきめ細かく確認していく必要があります。それがイエス・キリストの心構えです。そうでなければ、イエス・キリストが十字架で死ぬ理由などはありません。ということで皆さんは、皆さんの能力、才能、環境、状況と関係なく、必ず勝利するようになるし、一回限りの短い人生、尊い貴重な人生、伝道者としての人生を歩むようになります。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。イエス・キリストの心構えを理解して、自分の評価やいろいろな法則をすべて退けて、ただイエス・キリストの心構えだけで人を見て、人を見る目が変わり、また人に仕える人生を送ることができるように信者ひとりひとりをみことばをもって祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。